俳諧古今抄

新製東花式

星ゝ五

俳諧古今和歌集之下

再校東花式序　　蓮二房

むかしより歌の道とふかく仰給のもよ家業
虛妄なくとなをきゝふかく和歌を儒陳如の
實にはまり儒書の旧百余年も實ゆるく
ゆるくとへあるゝ懲悪を編懲ふかう虛とて
和懲をもとりて時の要にしたがひて虛も實
ハ實も實あるゝもはなしとなを適世ことのとい
ふるへしはて俳諧のゐとうるや和歌連歌の流

を設ふる事をおくとも式とすべきはこれ
理とまでは法をやぶるとも代と時の様変と
なりて二流の博士とあるべと儒師のなる
いまだ人とうい達能の家ゝ宮廷ゝ仕ふ
歴実ゝ自在あれいたれと二流の設ゝ
はなゝ今此一冊とこれ式の所録ゝ初篇
の中前ゝあれうい五不六宮の設とあけ
いゆる万通の例とあり先ゝ二流はなるを
ゝして百世のゝ法ゝ音用
の変ゝなりて月毛の設ゝ

ゝ一変として同録ゝ古法ゝ祖篇の遺訓
ゝ地ゝ○は白圏とは百ゝ今式ゝ先所
の新製ゝ地ゝ△は白角とは百ゝ
二様ゝ取捨ゝ中ゝひゝんゝるやたゝや二流
の設とゝ中ゝいゝ孟子ゝ人の新向とはゝ
辞ゝ不道の罪とおゝ
おゝて法ゝ道ゝ一ゝ中ゝ者りの博ゝあゝ
ゝゝむ天下ゝあゝ時ゝ喧嘩ゝかゝ
西成敗とゝる刑罰の法とおゝ人ゝんゝたゝい
者とゝい刑とゝ古法の石同ゝ変とゝ当然

の理をもつくしてあらまほしきを禅宗の向きは
殺父殺母成仏否と問ふに自己逈照看とへ
成仏不成仏をかへりみて答へ父母をとろんち
あいらとのらんを問ふに向ふてこれを僧の法を言
とをあらはせども儒者は実を表して不空の
書をもつくしてあらまほしきを仏者は虚を表して
自在ありとをいはんとを儒の祖とあつくれをも
い宰予の井仁の新問もあつてを貢首人
の勧語をもあらはすをを人の難口を
こらへ近いいてはを儒仏の要人を例の書通

自在ありとをやをいはるをにはある事を言部を
禅をきをを扇をもををを公界を作法ををあり
つを祝聴言部の埒をあれい秘をを用ををを
時ををを日をを座の財宜をををひてをを故
のをををおいををはををのれを石をををををはん
きををを和尚座の五位ををあり中百言一失北
念を入るをを日にくをあやをるい人の法をを
て年九年の非をを人をををいきをのをの非
をんををやいをを我を弟を万疑一決の針語を持
をををを一九の要語より近く一世の要議

を霊ひ遠く百世の盟ともせよと我し諸子
おそれてはそもそも〳〵諸子はそもそもおそれ
ばかりやこそ〳〵享保巳酉の秋八月十六日叶
序文を書終て文昌観の塔前に敬
つゝ薫誦再拜するもの也

東花式用録

大段十二箇條
小段五十五條

一 花を採ル事
○幸崎のむゝ山採めるす　○花を採人のす
○新集を鮮の採めるす　○樣葉集を糸採す
△唐土北芳野を採めるす　△採を北昌ちのす
△岩根の花を採めるす　△二句一意の花北すす
△春秋の花を差ものす
一 月に見る星北事

○霄漢と月と合する　○夏各其月のもの
○星月相対設のもの　△雪と月と星のもの

一
己れ月其事

△前句より月といひかるもの
△月より句にまたがれるもの

一
月其一字と混見の事

△月と一字とかくるもの
△月とうとうとあるものの

一
儀式の席と挙句其事

△一字の形を名のるもの　△面白頻白のもの

○屏風の仕と草と盃のもの

一
當季と物名其事

△玉其美容のもの　△梅や垣のもの

一
松虫と句法あるもの

五と字五を語其事

○春と春其附合のもの

△仏所の俗こと其もの

一
新向一と句作之其事

○幸蹄の松と之様のもの

△第八と曲節地のもの

一 附合ゝ七名八躰ノ事

○ 有心　會釈　遊向　起情

向附　相子　色立

右七名八躰方ニシテ對附ハ員外ゝ

△ 其人　其場　時分　時節

時宜　天相　觀相　面影

右八躰八附方ニシテ空撓ハ員外ゝ

一 懷紙ゝ名目ノ事

○ 百韻　七十二候　源氏　五十韻

四十四　旁仙　首尾吟

一 束韻ゝ向敷ノ事

○ 源氏行　○ 旁仙行

△ 長歌行　△ 短歌行

一 同季ハ三句ニ玄ゝ事

○ 旁仙の遺訓ゝ二花二月の例あるゝ

○ 名殘の裏ゝ春秋二句の例あるゝ

古今抄卷五

古今抄序目終

新制長東宅式　　皇子〻五

一方法一例序　　東宅坊

ひらく古今の法式とそなへ修理し兼通別圓四代あれい儒書を礼乗書ねめ式ありてかこれを又百の戒律と書くしこれを威儀とそなへまもりてをもるとはあふ人の修行の時をへまもかく慶雲の功とはをして結しを時と為るを時をるを縦横自在をしてちるを離あるへるはをしあり此をと重人の要通をも此をとをへ

ある一しきれい花揚つをもるを法華運俗とはあるを人も如を出家書を屋をあるを旋もを時とれいらをもをひを時とをををれいてををを名人いをを知のはをるを一しをもやををを俗諦い花家れ行のるを先ををらを齊楚めむをれ各とはをを世代を五倫の交とやをけをを歳の各いををおを〻を〻を人はを中の句はをあひを人言七言の体をはを〻を百韻の式は空より出るをいを〻を百余年をを〻をはをん出をを儒行を法師とををひをを出の優性をを出ををを〻をを知を

いけ俳諧をひらめて和神の和歌とかきたむるを
ものとしるべきなるべしとかの式をとるべきまへ仙
の所言と俳諧して貞徳の御筆をひらまるを
しるされも連歌北家なるべきへい応安の新式
と録所とおきるべきの例と俳諧めりちらしあり
て一歩をもとめたるひとあれりはて和歌の
俳諧いまの年の新制襲まして俳諧の式奥
とい各ぶあれいまと所をも向の俳諧をとんて
指合を嫌のはと言るべき古式の論をるべ
あるべしなりたれと一式の設をいるべ

加茂のはとぶしいくさく北設おぼられ或へ
記向の廉ぶよりも或い書神の実義を失
ひて後と暗記をるべ抽かくはるべやはをめら
え禄の中北より寛永の頃をて和歌の連年
と所ひあるきて当座の法式とはをもかる
おもしまをかくのをくるして接まれい方分ら
一ぶくやと一日北を例の一部をもてそをのれ
とをる一をれい当と式用北大法ぶをあげて初め
貞享式の所録とをるべ生るべ俳とおをる
沿当連歌の中と一石連立の所とかをへて

祝賀の歌を詠ずる俳諧へ言偏うて傳ふけり
俳諧の人偏うて深く作るべきれいは式と今世
の製あるとして深き結の御用に明あんんを
月に雪にもよるるはくくあくくあくくに用くく
あくくにて設けて世設あんんまれまく
新式の本懐にして敷時の世如くくく同新
の用の用と言れとも世時寶永元年のく
十月十二日ね年の靈前に世稱とさけて燃灯
新花の信をはくくて百世の真偽と爰に述
まくくものや

新製東花式

○花に梅花事

おもくくは新に月をのつよりは手まく麦の秋の
来物といひまくは飾あれい世代世
五節に来まくくて旧例の辞義を調るら
くくまるに新意を求くくまくまくまくまくまく
白雪の遺訓あるやあるに連歌の古代
より花に梅を詠るまく梅朝とも
呉名に呉新の物をまくまくまくまくまく梅の美の

とをされとものくさ紙と称するのこと記いはゝふと自知まる所もられ也けれ共一冊を
故あるゝ之所在の詩句とあげ次ゝ我堂の
鶯鳴とあり也て百世の設ゝ後あゝんとも
例の家議ゝ用捨ゝ之一

○ 幸時の桜を忘もり脚ゝて
山ゝ桜と云ふる 幸雨

此番白い湖南の幸雨ゝて今ゝ句ゝと
詠ゝるゝ及ゝて幸ゝ雨の山桜ゝ之射の
実語ゝも時ゝ桜と忘ゝ也ゝひらゝ雨の桜と

いゝる花ゝ桜のゝ桜ゝ之ゝ花ゝ桜ゝ也ゝ但いゝ山桜
いむゝ也ゝ幸雨の山桜ゝ之ゝ花ゝ

○ 詠ゝ花ゝ桜ゝ山ゝ桜ゝ人
叩ゝけゝて
此句ゝ檀林の俳諧也ゝ之ゝ中ゝ古ゝ此ゝ句
ゝ之ゝ此の俳ゝ之ゝ古ゝ之ゝ之ゝ例の古人の句
ゝ之ゝ此ゝ俳ゝ諧の論ゝ及ゝ但ゝ山ゝ桜ゝ人ゝ
僧ゝ其ゝ雨の名ゝ用ゝ有ゝ之ゝ人ゝ花ゝ之ゝ
ゝ也ゝ桜ゝ也ゝ人ゝ有ゝ也ゝ花ゝ桜ゝ
不ゝ秘ゝ秘ゝ訣ゝ也ゝ

○ 春の夢とはけも鶯も桜哉
花宴部より出たる歌也 一方田

○ 三月の末より秋く山ゆく蘭の花ちる
花宴 桜 脇一さいよ咲よきり

此句を加茂の遺訓やおの桜と新集此外句
にて新撰の花宴に出花あり後の桜猿蓑
集の所合にて新撰より出花ありて今此
歌桜を各殊の曲節也あり日本書紀此外
よりて系統より此二集の撰和を云れし加茂
い例の笑ひく中さや秋家の出花論より花と

桜とあるも桜とあるもはなとを言語不到
の所桜とて花を秘訣とはなれて二ヒ
子なれ者を作る中やはなとを作る一 秋家此
俳諧集を天和の比より俳諧を冬の部
を論し及て連歌を および新撰集とられ
て花実を捨さに猿蓑集よりて初作る
此比の歌俳集を変化の中此曲節にて俳諧
いかくこと変しとる一一とられい猿蓑の大任
系桜の差を一部の差を軸にいひ集此撰者
の句をんとを変に各殊の曲節をもて一部の

屋宴とあり八重咲やの句は桜を例の秘訣より
て出て色てを文章は優游ありと我
△ 発句 あるこは芳野と岩と牡丹か
花の盛 我国のたとへ山ちく咲さまり
此発句を特別のものとし完あき岩と牡丹
をかまくる掛地の屏賛やさると彩毒の貧
とあり天日は俳諧い興りきに和歌の
花をいとりてをとし桜のこをと用ゆを設
いうしとあれい和漢と花をあるとひかて大和
の芳うを様をとよく諸越の詩をへ牡丹とたれ

いとうよあるこは芳野と桜いあくて牡丹或と
岩はてをこと岩はをとけるい今く花をの事
ちるや去くい花はよいてりて我国のたとと
称をたんやこれをは風雅のこ記りて事言
八牡丹をひ様とよ心調の花をとるこきも但
諸越をへ牡丹を色きて百花のとて
こ咲きるをりを石あり我をりをる
△ 発句 ちりをを様と伊達の憂名哉
花の盛 入逢も中を屋人の 帰花
をを外山の霞をよ和歌あるかて紅を

又すの字をまへむとかくるやうにて養の
花にてよりて例の家訓と家に桜と花を
論ずれと家に墨とて調をむすびて桜と
いふ事をいふ発句と花とをくくきんけ時と
も様の序むとをきくやうにきたの家訓い
一味をり仙いむ尾の二ついの中の二ものを
摘をりこれをを運ぶ能詩をいふ

△発句 雑子いろて墨をいれを書きたはね
けを発句をいふ中即事をいはりはてを養の花にて
いをりて例の家訓と家訓ふと思はれを毒の花

又ふ法をしてをこれを例の名をはね
むあれい家をを桜やをりんをあを桜の一字
をもを仙いむ堪電のをを桜の名をを時
をはををを句をを発の字ををる一一

△前句 発の字をいふをををををる
附句 唐衣をむを咲をれい世を捨て

けを附合を越の新深をを雑章の色里を二を
雲仙やをれい雲仙のをを二折の花をを白
を附句を同作の句をあれい名発の裏をのをを
時を例を花をとかをんをを雲をあを北拍雲

とりて同作のもとをもむきそらふいそれと
向ふとこそ解迫とは席とゆゝけて絶音百世
の体をとゝあもむとゝ八ゝやゐ句の音とゝなりおあり
く音とゝ北ふ句とゝもておあく鶯の花あゝん人
今北をゆゝ音通あゝ音戸四ゝの花ありされ
ゝ二花の同作とゝかゝゝ同作のいられあゝ
ゝれあゝゝ句ゝとゝ作ゝいのゝ用の所
ゝつひはを敷ゝの罪通ゝ音北お句とゝ
前句 △附句 袖 衣ゝぬゝひゝめ咲ゝ花

かゝてはゝ花の詞ほゝ百韻ゝなゝより四折ゝて
祝言哀傷の儀式ゝ音句北作有ゝ各様の
花とゝゐむ所ゝ事北始終あれいゝとひ
音句ゝ花あゝ桜あゝゝも各様の花ゝ音
ゝゝゝれゝゝて二所の俳諧ゝひゝて
二所の二折あゝゝへは例いゝゐもあゝ八ゝむはね
ゝ今北事ゝゐ不ゝ袖衣ゝ百一ゝ
ゝあゝ花ゝ一ゝゝ二ゝれい例の罪ゝ通一ゝ
△ 音句 花ゝ音 白花 花ゝ音 胡蝶や百の魂まゝ
胡蝶ゝなれ音の音

計詠を誠の井波まで芭蕉を えひす案内
の云名をあげて一もくくさ魂をまつれる義軸
此百韻をかりされい爺お句を意味をはさく
秋のもあれい白花をてんりていを見れ胡蝶とかれて
て計花の客とをされい後の花を全くまて
一まれい花よる胡蝶を二句一ことの格と似あ
ををを花の泊をかりて計花をいくもしるをかれい
胡蝶の花此所有る客の花をる有る秋と
まを此差ふをとる一一家にをいは式のはたい
彼ゑを例方格をて計のの指合を嫌もを

をを射の用をとをあ〳〵あり計詠をよ〳〵いみを方
所を方も例の義を通をる事

○月にはを星此事

むをよりを連歌をも月を百韻をハあれいを花
くをあ〳〵あ〳〵て不事此はたしおはる一ゆ
をりはをいひ星ををいをを天象の表嫌ハ用をを
百をひけをも月次を歌の詞をハ作者を雅事
も伊流を時もあんにを作をを雅ををを
星附の句をを戻を一ををあ〳〵ねへおをれを

先格の句とあげて當時の說とまつしたもとも
言まへ月花をよつてうたねるを限見の句に
あり

○ 青陽とあつ物の神の字遷て
小より萩に　はたとうきこゑ

は青陽とせるとて故ねるを名の說あり
とて辛紙の句月を例の月秋と新れい
は惡意の秋季とものをしれ十六七の青陽にて
唯今は月の附かくれい変ぜん神の威霊ともて
萩を向益とのことを一きを時の命報やまれと
青陽のお越を月のあらのはまむかつく

はたとて句月を月とうをさい辛紙の秋季も
やあつく花よの月とせ念ちんを変を限見
の句にとやらひて

○ 八月を旅おり一ろきく小幅綿

三句を加に中秋の名よりもてはやつ給ひ
月の三字とあつてもむうるやを沒をもを青陽
の萩を唯今の月に而京氣と合せて月を字
を古代とをををくい辛紙を二七二月の生れ
とつひ近くい書産の城用をて上きやをもを
世等の說を如義を例の妻通ちんを我行め

学者もひとりねてうとやあやまりて五月雨を
ゆみ月ありとよるの体なるの真虫いとて行人
とありて百世をおそるべきを思訓めばはあり但
いとむ陸奥とは米の酸の汁の句を合せて一
○六月や峯こしをしくあしの山
そそ嶮岨の落柿舎にて名所三吉山の参詣
ありはたの句はいとて長名の月へ何くあん
三月次見次めされとあるとは射と異名の
俗論あり古れい連歌の古式なるを論ずる
つて或を飯(イサコビ)とまりとひ或を三月とまれと

むまとて盃のれとも月にあるを俳諧の和言
りて今の用まあるを古式の設し法を
時をとまれとまれ新鮎と燥の時句と燥ぶ
時をは四月の例をもちいて記とをめを
実制とて一年竟を論ずる此論ずて
月雨(カワヤツメ)を月と燥(ツミタレ)雨を燥ぶとも
る耳用の変をもるべきを也もちいる用ずて
五月をも訓ずる時い燥ぶ二月を用とも
書ずる時を月のひきあり生れを燥ぶを
名あれて抱るの法ずいたれを假名を

かく故に牝牡の偏あれども二月八月などは假名に
かくれども月などの字は牝牡とおぼえもなく漢に
音訓の論あり今はいづれの月とも
音にはよりて一人ものの月と訓て唱へ語ぶ
なを天のひさかたなどいへるは音訓の相用と
いふべきもの歟又名の次にて星月夜の
語論あり古歌に星月夜の名とあげて秋
ありとしるべしいにしへ月を嫌の論ふるれども
なほ秋にて月を詠ずる俳句脱落とまれて
は名目ある時にこそ句に秋なくして七句目の

月なとは他の季にて是名とて一二これを
例の詞なりとも秋は從今の論をまもるべき
故義の説訓也

△毋と仰て蕉花子の　月日星

俳句を賞は金吹を味ひて毎のごとく俳諧
の名にこれて晩年よりは蕉翁と尊ぶ花雪
は霜ふりはれなどおのとなれいかく扱いきる
ありけりはその論に等似を今は二月二
なりけり月日星なりのあやまれいおもも
てを月を用ひかつ一二これや星月夜の例

あつひしけ雲の折ふしよ名の月と共ひ
へ〻ひ〻ちへ月の山ひ秋の雲ちへ〻ひ〻
は今ひ但ひ月の雲ある一一ひ〻ちひ句の連論
をひつふひひひひ歌ひ冊の一ひと載入て
あひひ雲めあやとひれひ雲ひいひむひ論
あれひ初ひ論ひひひひひ月ひ雲ひ
ひ句ひひの連用あれひ冬ひの方ひひんひ
月雲ひ祝ひひひ冬ひ雲めひふれひひ
一世の裏謀ある一一おひて月夜のひひく
一ひひひひひひひひひひひひ

○これ月ひ事

世ひ俳ふ連俳の式ひ月雲ひ指合あひて次の俳句
ひ月ひゆひ時ひ月ひひ雲ひひひひひひ
ひ句ひ間ひめひ和ひひふれひおひ月雲ひひ
連俳の宗ひひ式あれひ三句ひ句のひひひひ
指合ひ遠ひひ一一ひひ性ひ貴賓ひ人の句
ひひひひひひひ時宜ひ雲ひ宗匠の
移員ひ一句ひ或ひ雲ひ句ひひ
ひひに懐紙ひ載ひる時ひ三句ひ句ひ

かくて時に今北附方とて次の句に月とこそ
一まきやそとも今北附方に三原の雲月とをけて
お句より月といひかくるとお句にまくまく
と平意を例の三句三とておのる海より
月とぬくもハこそ雲の月とおもてとるに
前句より月といひかくるとこそ
掃地が北堂より不化められ和
△ 玉北をそれのる其意前
あらるる北堂とくと愛ひき
と青の月北合をかれあ

ちれにお句より月をかくる月をなく数句と言
に及ぶまでお句北堂より月を堂
に堂にまでお句より月をかけ
数句と言ふ時を
△ 踏てゆる男藤の山の端に
月も嬉しとおもひ堂
此月を雲伝の句月に三原北附方北
一舟や彼ひとお句の今舟より月といかる
句代に句に月に藤の男ゆるを
てをめる蕾句の数句山の端の古語と

かりて次の月をいひけるうり畑にはなれ附を
い「蛙」をとるくにとりんの語なる秋
の夜の月とよるをとる長夜歌入るうり月より
こちらくと蛙をとるをとる蘇特の句にて
二句の間よりちらくと入る附ことの花活を移す
夏の夜の月ようおの句よりもとれくとる
ちらくと書る時る。星花表
△ 朱花はもりをゆるの庭人
年よれい氣の短さを秋あり
赤性の三月なる也月

きりや彼て三月に月沈月の指合を字を
歸よのこちられこれ子星花指合を蘇向を花合を
遊をと句作を當用をあるをと二本の骨折あり
て芋をこひいかるもあるれをいむつ芋き附合
あり志るにはる花秋をるるを芋赤性の也月
をよりるるの三月の三月花呼あれい花分時の用をを
ひて早竟を也經の敵對をして句性い恥の一字
を尽をきりこれをを對の格を附おはくい性の
をこひをきるを一粒ををくはる花秋をる不い行事
業事のつのをを名をはくを赤性をを屋赤の禅つ

元亨の經氣と聯合する月の働をはらみ
下ことの石の貞合を神助とする一
△ 二物とこれを云ふ 月北和
はらとなる 月北和
は陽方と陰性の兩用まて二物と云と北雲
とこれ一物也二ことわれ月の陽方いひかくる
事まれ也言の間北石和おはくとなる
ことあり めとこれ北沈句とする一
これ今工原と東お後二原の凡例と
ちくいこと集を例のよ重一方化ちる一

○ 月の二ことに見北事
は格とおとこと云れ月のれふう或ハ和方
の指合ハ或ハ天象の去嫌て月の時とする
あり早竟と月ふ字と陰ハ見ハ見ハの二和
也見北と渡家ハ月とかくとこと云
あり風て月とかくとこと云
秋ハ月や朝日北星ハ
△ はらく拓め星ハ稲の名
姉拓め言ハ北神われて

賞ましい発句脇第三も一巻程の表に合せもはれは
朔日の脇文のそこて月をたむつかしく第三にまし
て置きし指南にはも早六句め表にある
まて月をこほまて下まてあやねい賞に棟捨の
名をかりて月の作をゆくするもはりや芳御を
と花とらひ文科を月とい名もし文政ハ月花さ
あるとしい名もはして出句を四海と天下
なる山田の形容を称をさんや去ぬる所
そてし芳卿とらひ文科とらひて月花を理を
て論あるれとおるせらつるとらてねとに作者

め眼力をと気へまでも陀て月をあつゝまてきを

執りよきるもかしく　陀稲川

紅かくひしせ笠せ　夕栄

△

天堰をとをむもをみなしもるよ
寛をひとれと片落てはる丹

此損和を越の三国にて陀稲川の二表を翻して
紅るとせ陀やしろせたえてかけまるまりの六句表
あり表るれいせ二表いひれて為せ発句脱まて
ある月をおあしく月花あるよたえてつけまる
御あるぐいし此表まへ花をもて月と花との

兩説とあるべきなれども古代を考へるに紀元の説は秋季なれども又今より六月秋季なるべし第三の花和名抄にて表に月をあらはしたる例と
なりしかるべきやうなれども万葉集に例
かりて侍る月の名をもつて古歌に
盈月とむすびてあるは月の異名を用ひる例也
ものもひたる月を気とつかねとむすびて
気と秋と隔てるを及つきるより月のてをあるを
のこる夫象のはなとも通るべきやうなれども元例
とて時を知るべ八月の例と考へ

ちなく月むの説とて花を元像あり月を八像
あれとて子も自己の名目とのあるを注せ此を
まもるべきやうにて例の不得止とする重極の極
北斗を通るべ百世と好事の人あり寄とう
新とあるとあむとて侍るを月をとあるべ
月をとう神国の礼用ゐて例の和を一く例の
節を一く例を大和の名詮るとあるべ

○儀式の席を巻門向北事

我宗の巻門向の拵とて月次のをき座俗語を

い論句一或を祝言命名といひ或を哀傷離別
の時をおほむねふる近の発句あれい名残のむ
とゝ云ふ近ゝ句もむるすゝもこれい発句もはれ
ゝるまゝ花をあらふ一れれい或を一座の老人
ゝ或を親族の切者ゝ句をもむ〳〵しらを一ゝの
始終を調ゝるゝもゝるゝと今此席まを
発句と成下此場おとおもして句ゝ成ゝ
事をゝ人もゝ座をゝ出ゝて果を発句
ゝいひ捨れゝはるゝを一座の俳諧ゝて或の
論ゝ及ゝゝとゝ云ふ一ゝ中もゝ俳式の俳諧ゝ云

い独発を一ゝのゝとゝ云ふ句ゝ名発の句ゝ独発
ゝと云一ゝ所ゝ名ゝ発ゝ句ゝ独発ゝ句ゝ発ゝ略発
ゝ一論ゝ及ゝゝ云ゝれい祝言哀傷の発句ゝ
祝言哀傷の名残のむゝ句ゝもゝ別用のゝ句
あれい発句ゝ発句の服ゝ加ゝ句ゝ花の用
ゝゝゝあゝ一ゝ発ゝ或ゝ貴賓高客ゝ発ゝ
時ゝ句ゝ一ゝ発の俳諧ゝ発句ゝゝれ独発あ
ゝ名残のゝゝゝゝれゝんゝ発句い一ゝの
ゝ座あれいゝゝゝ句の所ゝゝゝゝゝゝゝお
ゝゝ合ゝね書ゝゝゝゝ一ゝ俳用所用ゝ

時宜さとる一きもある事例南北新案ふ事あるべし

△ 発句 七浦やてよめりそと一ふしはし

発句 面白の所もとりつくれハ京

されいと時北浮論よりは発句とは実義ある

あるしなり発句の式とおもふる名所と雑の

発句も似ふうとそこに当季北脱とはけ

て四季格ともいへ(きこうもしもの服と

意とはこうもうもうの名称のもいへうもて

発句のねとよりも配をへきこはれを例の

よりのはねの教もありきはれと発句北実体

まんけ北沢のはれあるねまん発句も一句のみなる

あんこうとて露のてをとまて七浦のあらいと

をはうをを宝家のこまはそを露算の発語

とかれをもけおを発句の事をこをへの

重面ふうを用所用の言ホうををさん

△ 他諸を今人偏のもはうきて

面白類白月白はえはう

○ 陳ていきをを妨をはれて来て

屋内のはを人命の菓子盆

けこ連をを用と世有也前を新陣二百韵

真竹のあるにしたがひて竹の百韻の発句あるべし
はるゝ我家のむねとする人偏の俳諧にて百韻
なれとつゝしむことを用ひ頻句に拍子かけるべ
一句にて用ありとして百韻一句を彼ひ発句
又変化の中に典節にして名残の花とする所あり
これいまゝにしるしあれの所合とのてあとの百
ぬと思ひとされいおもの一句にて用ひしとして
もこれい発句にて重ねて詠ずるを不吉
事一句一句のそこを長と為べし事ねと
にて用あるい事ども事一句あや

○当季に物名に名に事
古歌に当季に物名に屏風にひ牡丹の宮殿とよれ
とんあやふく平家に用られとするくの発句
にある一句也俳諧に扇合とひ桐の間にまれ
に論あり雑に用てく当季にまるかふに当歌
ある一年歌にて用ひあれいも
△ 附句 白雲の玉に菓蓉とよ居して
附句 折かゝと梅かの 伝言信
前の菓蓉に牛乳の句也られにけり玉菓蓉

八仙人等と名づけて曉の雲とうるはしく
あれば等と等を名の名目のみ用ひて指合を
くらねとて等を句に拙の指合あり等を
と書を用かくまねを白雲の二字とあらし
て後の指合やれるとあり
くとあらひるる句作の意ありとて此例
て千句一巻章も意とあるべし

秋はもとのやの菜とめの色
△ 簾とやとりて立て此月哉
ひるぶ嘉も鈴し 杜鵑し

けれ杜鵑の字と和漢と奇絶の句にやちらい世く
又韵字なるも何くまてそと錯綜顛倒の法
とひて論されい字のぬりやそないうひと
あれいけ句とよの法れを作るけを杜鵑や雪し
鈴と呼くぶとて一名れと餐句を疑のやり
あり字三と只合のやりを遠を〜きて
杜鵑もとて一名れと餐詩をあるをあるして用
あ意とあて顛倒の法と用いる句作のを用
と称を〜きやとくけの法とを〜餐稲
喙餘雞粒岩梧棲老れ枝とる杜鵑陵

らぬ句也是は顛倒の用といふも香稲粒といひ
碧梧枝といへば粒と枝とはあらそひて用ある意を
ありて顛倒の法ともちゆるは錯綜も顛倒
もあれどもすべて手段とあやまるもの也されば
杜律の諸おいても錯綜顛倒の法とのみいひて是ら
の細説まで及ばざるはさきに覚来る事多し然れば
は蘇鉢の法ともいふべきまでや雪も鈴も花鳥といふ
結語にも此一字をあやまりて其法を詩経の七月篇
ほとんど一意に似る文法も句格もちがひて新奇
をこのむ人はすべて句ごと字の用所用あれ

心をつけて学ぶべきは此格の用にして学びておこる
べきは句作の外に用ありなん流行ある人は物合め
あやふくして句作のさはりとなるをしるべし

○ 五字五て語る事

むかしより五字五て俳諧の格を和漢に詩く学者あれ
あれど附合に此格を用ゆるはおしなべて俳諧を始
とやいはむ爰に其ひとつの證解を書つけぬれば

○ 前句 羅此梅本に　鳶をちらして

芭蕉 鳶の落るもの様なしとしきり

[illegible]の附合にて武陵と名づけし句也
[illegible]時の口語にて附をおもしろかるべしと寄せ
おもしろかるべしとかくてもかろく附るも
けれどもおのれと起て[illegible]ことにそれ
い起[illegible]ばかりにて附合にてそ[illegible]
のはなをかれにて今やはりと格例にあるべし百世
にそ子此作文といふむさけ附の注用いかの句
のはなとなる一事也[illegible]やう句に作[illegible]といふむ
に心部にとそ[illegible]むい注[illegible]の例あれい
今此新製にそいひかにあるべしかの賀此小松にて

ある人の附合に

△ 此[illegible]あれと此[illegible]ことを服にて
名をいふくに[illegible]は取のおもて
け附合を名殘の曲あるべしうを名をいふくとて
詞のよの句に對て[illegible]を作者の附る
い此[illegible]にあれいをねとのを名いろく
といひかにをるべしうを句此時とおいて今此
俳諧の事にていむるあれい[illegible]語の格と
△ 此[illegible]あれと此[illegible]
此[illegible]にて[illegible]

ひくい口語ようとうたの格とやいはむ
されいけ比の俳諧ようけ格とやいはるあるとかゝ或て
俗句ようる句ようてもそなるあり附合とかね
て附りかねるようる句ようる俗句ようてもむへ〳〵語語
の拍子ようちひあれい也ばれとて尊の句ようこそ
ふ句とふやとようる対とそ俗の論ようなきん
け格をかすようる合ようて〳〵

○熟句一ようて句作ようる事

中古ようて連歌の発句も附句も熟句ようて句作とす

是ふかれい教ゆう人もようあまるあるようまふ
有しようて調ようまふけれいようて我ようて熟句とこそ
て執中ようあるて熟句とこそ
めおすようこそ
ようて二ようる也事とこそ句作とそ
ようて用と竊ひふ句の作とこそ
ようてそこそ発句と附句とようむるの秘
の接やようる句馬の類説ようて曲節地のこ様

発句曲
亭 婦めかちとむようり脇ようて

○オ二節
亭 婦のかちとまのかね脇ようて

二手句地
亭 婦也かちとまのかね発ようて

は春日と湖南の春日とを一体の秘訓也
ある時本覚寺北夜話と如云と書子ら雑談集
と称して彼ら章疏の抜北論議とそれいてと成と
の通用とあけて可る可ゝねの法文とあをれとさる
い詐称の通答書ら北新の云事と仰ゝん
ゝ云ゝ彼と弱ゝ云ゝ北云のそれのもとゝんより
も章疏の云と聞ゝて而白ゝんゝと云て成と
云決ゝゝ。と疑ゝ云ゝ北の類説ゝ云ゝ月
ハ西月ハゝ誠。ゝゝ未決の中北決舞ゝ云ゝ
なゝ北と決ゝる時と和尚ゝ偏ゝ北ゝ

ゝゝれめなゝかゝ屋国ゝ北ゝ章疏の抜と
北の和尚ゝゝれゝ北ゝゝれいゝゝゝ可ゝゝ北れゝゝ
と典節ある抜と者白と云ゝ一ゝゝけゝふゝ様
と云ゝ語ゝゝゝゝゝゝれい者白いかゝめゝく
北白ゝゝゝゝ北ゝ様ゝゝ新向ゝ例の北ゝゝ
自作ゝ典節北の云様ゝゝ或ゝ真竹行ゝ北
或ゝ不易流行ゝゝ各用ゝ中空万容ゝ
ゝ北ゝある人北ゝ空ゝゝゝゝ茅ゝ宿の屋
ゝ孫簾ゝゝゝ服ゝ中云ゝ北ゝゝ屋
にゝのゝく孫のゝゝ北御ゝゝれゝ例の新向ゝ義入

とはるゝあり句作とを萩此接却あんらゝ

曲 義入めるれ大名此萩咲て

節 義入めるに陳ゝ萩咲て

地 義入の地をゝ門の萩咲て

△

かくゝ様の句を作りて一方の実詠とうかゝふに

おもてを陳の萩をゝ移ひゝぬゝりゝ大名

萩もゝいれゝけりを一方此俳諧あれを奇言

新語と好むへきゝあゝゝゝ弟ゝ門の萩

ゝゝゝゝゝねゝてゝ今此夜詠ゝおゝして我門

萩の様と事をに門義入の地をゝ萩も起れ

て作ゝ前の言ゝゝゝゝゝゆゝ一名れゝ起

の傳を地ゝ曲ゝゝ後ゝれて奇怪を教ゝれ

ゝゝんゝ門の萩ゝゆゝ合ゝゝ例ゝ一方ゝ

人ゝ来ゝゝゝゝゝ耳用ゝかゝゝゝゝ階

いゝゝ此ゝゝ失ゝゝゝゝゝ用ゝゝゝ

可ゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俗詠ゝ語ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

襲(ケバレ)の事ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きてあるて侍れいまは綿のさしひきあるてよ(一一とうよ
よ直ふとうる人も感ぜらるる人も侍らまき

○ 附合よせ名八辨ぜ事

中院よ和歌ぜ二十辨よ連歌を八十辨とやん
附合ぜ名ぜ俗くあれとも彼を艶詞よ付ぜ
ぜ名を事詰よ沙汰ぜ事ぜ有る故よ連俳ハ沙汰
のぜ名ぜ一歩手ぜ置ぜ侍ぜ有りて各ハ辨
用ハ異ありぜ有るハ一ぜ侍ぜ秘門の俳諧ハ書方
よぜ名あり附方よハ辨あるて各用ぜ侍

十八條あるて侍て事方ぜ名ぜ名ぜ本一ぜ有心附
ぜ侍ぜ名ぜ須ぜ命新ぜ侍ぜ附ぜ次ぜ通句ぜ侍ぜ人
白集ぜ名ぜ侍ぜ事ぜ事方の所ぜ侍ぜ
ぜ侍ぜ和ぜ中辨ぜ和合あるぜ人人ぜ変ハ起情
ぜ侍ぜ附ぜ侍ぜ掘ぜ命ぜ命ぜ歌の接和
ぜ侍ぜ命ぜ名ぜ名ぜあれぜ侍ぜ歌ぜ十論
ぜ侍ぜ変化ぜ侍ぜ合ぜ一ぜ侍ぜ名ぜ縁
ぜ対附ぜ事ぜ事方あれぜ侍ぜ曲節の変
ぜ侍ぜ名ぜ侍ぜ侍ぜ侍ぜ侍ぜ侍ぜ侍ぜ侍ぜ
ぜあるぜ侍ぜ名ぜ侍の変ぜ曲節ぜ

△ 高ひ北功有るを称をおくること
親の位相も高ひ北 表（ヲモテ）見る位
されい古代の對附として老ぼれの名を北様とい
ふ常子され様の禮と附くるを対とらひ意
對とらひ後も勝負の相例あれど今子親と
子北對を所の高ひの表（ヲモテ）庭より北位壇の面（ヲモテ）側
を對て全くよるべ北れい詞い白對といひ
あらゆることを例の百一ことといふむ言れと言練の
事北事をいひからの宮あんとをを曲節北
秘様とをて世子古代の對附と今子新

製の對附と所て所為代のまきれとおるい
用て附方の八所とを引とくを人をおくを北も様方より
衣食食負福の不をとんをけて来る有心の
附方とをるく式場をおる白北東洛山海より
宗内と亜のをとひを人をけておるくを今秋
の附方とをる一時合とを晩朝会夜より勤
明清の所法といひ時節とを嘉言秋冬より
節供四月の行事といふ三所を表用ふて
或を有心の附合あるく或を今秋の附合
もあるとをるに時宜の一所をを北を時の

風俗もこと葉とともの接数も俗語を事詞の優游
あれい一所一所に附合もある一一天相とも月
星雲霧とも風雨雪とも腹を足すもて此腹の腹き
詞とまておほくそを題句の用とする一一親相
そを句ことに表すもて用ることもとも人世
の哀乐を陽て歌をへく草のもとも物の哀
も歌くひ乐とのむ二優のおもさ物も歌
をへあてら歌をちんもれも歌和の句を一所
を歌むら附方ふれいもを用ることも耳をひく
くねと一ものとらそて一るう三るある一一これを

屋実の味也面氣とを歌和よ似あの或深は
狭衣ら或い軍書物語めをくををい発とひ
物言といひ代めあり為とひもて書のく
此面氣を写をんをもるることにある一それ一を
をんめ名ををて一例の二句をを一くをを
春るもも附るもれくの面氣をよをふる
用ををを耳にひくれを注れを故の書方
て百るを百るあ一一れをを一とる一一れをを
和歌のはををれい八雅の負分もを立接と
ひ附方あれを注るを八雅の堪梅ををを

ひとまつ用をなさしめ迄にぬるとき後世の
俗ひとつ世人所着此紙をれい人と敷るよりあ
一ノ例の五式とこそ分て一きとへい

△ 障子をこれの多日 ちつけく
賀殿をそれをそれ老の用と接い
じ白に二度の賀宴と嘉よりあるよりあの下まと
宴をそそそそ多日のうへひとり降よに本行の
れとこれをと附白を折後の度なとて一それい
賀殿を我白此作とやいいむしまれもけれい
こをてさとり主をなくて人の豆取くれこれを

如賀のに答とて上一きこうや接まれい附合の附合
い起位の書方も附ふ主に用とぬるけく
賀此これをるとり白作をれのちけくこて老
の用ねそひとをあるをて人にはまにあるとは接き
主こん二年竟をせこん所着ふて手接こてる
離附の二度より変接の附白へはまれをきる
はしし我家の今式と書方と附方此差ありて
一度の附合こはとは時こ決て主おは越ち二白の
をそひとこん合せ次こ附折の変と書一次こ我
白此おこ附重一合白の配と書をへしかくを此

時とあきらかにさてはなを有心の命歌の作を
道場の遣句のごとしたゞ七名の當用と書きたる歟
を船と書たるゝ〻ゆゑにてを婦の字をかりてね
ゝ真人ゝ真場の所作とをり天相ゝ新の新向
をはらゝとおもひおもひ用と作る故ゝ次を附方と
いひつたへられい書方と附方とをとゝ先
書てをを事とはゝ附方ゝ故ゝ書てゝはゝ差
ゝあれゝ二名一所ゝ書ゝ但ゝ負(イン)ゝ
をゝ對附もけゝ空撓ゝ古代の大ゝ法ゝ
ゝ作句を今は新製あれへおれゝ隨捨

のゝ時ゝかゝ事ゝ家語め多分ゝ
自己の名ゝとゝ

○懷紙ゝ名目ゝ事

おゝ連俳の一ゝ
てゝ十ゝ
い方ゝ十百新ゝ千句ゝ差ゝ
のちひゝ去嫌め用捨ある故也
折ゝ折を表ゝ八句ゝ裏ゝ十句
句ゝ二三の折を表ゝ裏ゝ

あり三月に四の折を表中に白ましを裏とし
八月に白き帖と孫の裏和ましてつのひきと
いとて名殘の折といとりはて五式の間に八面
ましてすいまを色にて懐帯の人持とて表
と面の方嫌に新皮ましをもちいまを色に次
に七十二候ましを百新と二折にをぬきて此の折
の裏を八月ましを白れに三花月ましを名
に七十二氣候とかくとれり風ましに折也
さらに奇仙の書和ましてゆにめ名用ましし
表白に裏とましこの折北裏と側の

白ましを古代ましを百新の書と減ましを百新の
折附ましに初うましに始ましてに二ましに三ましと
次第ましに名ましに名ましと孫ましを也けねに二折に二折の
懐帯ましに名ましに名ましと言ましに一折の
をは書略あれに又十新ましましに七十二候
に三ましに白ましを又十新の裏和
十二の折北裏とかるとをましるましましの時
とましあましを或ましのましに一折北
ましを作ましまるやましを名ましとましし

ゝを例のゝ俗習あゝ移ゝ祝言のひとゝゝ
いゝむ同年位ゝ各用の風あり侍るゝ十八番の
歌合ゝりゝ兵後以人ゝ年紀ゝゝゝゝ長ゝ二下
の句とあゝ包ゝ二十二枚の名ゝ書ゝりゝ
月花ゝ二折の式あれゝ二百十二句ゝ世ゝ伝れゝ
今式ゝゝ二花二月の始あり式の遺訓ゝ
所合ゝ人ゝ同ゝ尾略ゝ二度の時宜あり或年納
の祝儀と祝ゝ或ゝ歳暮歳旦の賀ゝゝ船級ゝ
ゝあゝゝゝ色ゝゝゝ八ゝゝ表ゝ裏花
ゝ尾ゝ合ゝ月花の三度ゝ花摘ゝゝ

右ゝ古ゝ花ゝ格ゝゝ或ゝ一折ゝゝゝ時
あれゝ侍ゝゝ式の論ゝあゝゝゝ花
ゝゝれゝゝ但いゝむ長短の二行ゝ花ゝ減後
の新製ゝゝ末ゝゝ東新の用ゝゝ短冊ゝ
い時宜の書用あゝ東新の下に入る

○東新の俳諧ゝ句報ゝ事

爰ゝ俳諧の東新ゝいゝゝゝ奥儀ゝのゝゝ
かゝゝ和歌ゝ新ゝゝゝ敬ゝゝゝゝゝゝ式
ゝ義のゝ前ゝゝゝゝゝゝ武ゝの素ゝ異業

あり。家隆遺集の今るとやうれて蓮社の六音仏
を偏されて宮薗々方偏々ゝ[illegible]
まりてやとわるを義をそれより[illegible]
い俳諧の世にも応用あり。[illegible]
と仰られし和歌連歌の中ならひて淡和ひ
歌といひ字ひて[illegible]
門生とをけ侍りてあり。かゝめ歌の[illegible]
と詩を絶句より体詩をそしく假名の一韻を用ゆ
へきれと歌行類をも篇ゝを[illegible]
あれ一韻をまりて自由あり。[illegible]

へ長歌行といひ短歌行といふ三体の名目を新製を
源氏行と平仮行とかなり古式の名目あり。行
のてをを除くの韻と行わるとつをより歌行類
とあり。但ゝ長平短平をを平仮の風流
に名をあひて古例をとれりとて一まを[illegible]
歌の俳諧をけ[illegible]
て六々の時を一韻[illegible]八々の時を一韻[illegible]
用韻を但一韻と[illegible]
差あるとを一[illegible]
歌の序説とあり。和漢文操と[illegible]

それは今の長歌行を全く東歌式の新製
なるべき第一を換韻の場合として百韻も又十韻
一韻十四字乃至八字を用ひい假名をすてゝ
不自然あんやうにしてしをとゝ今かくきれを
今此八字とゝ今なるもの第二の名歌として
一百一首の俳諧あんしゅうの古代紀
と八字の人まねゝ六八めの長歌を用ある一表八
八百字を裏と十六句と二折にして四十八字
あれは式用いまるもの又十韻とかゝを用
も例めもる用ゐれを花歌を但十八字用也

もの名古代を必ずるの句一句を短歌行を長歌
と對まる意味あり表を四字にして裏を八字
の二の折此表を八百字にして裏と例の四字也
はねも四六五字にして換韻の用あゝ短
うんゝゝ時と一首の一折あんゝり物と短歌を
ゝ表むゝるもとゝ我門の旁紀式と二首
の者はもあれは月花の設を多論にして長歌
文多の古嬢もゝ百古此有略あるべきゝや
保武行といひ旁紀行といひやゝり六を此古代
あれと保武と東韻の也にてゝん時を長歌の

六八を用ゆべく音位と短音を求韻の程とす
（きも色右の位ふを求韻の和歌音あるべ接
まれい和漢の通用して能階の字向と雄さんとも

○同季より句去きやの事

むべより右位の推諸も同季を多分長の定代
あれを多分をくれを多分ありて言はく和
いと言ふ（きも今の能階の者代と長秋い言
ゆるよりより及ぶ言ふ言あれいと良吉義
の季節の位ふきと例の去接ドされう百韻

の代をなりて連音の程をいはんとまも
あるを位て季を位を長秋の白屋あるも百韻を
位でおれの害ふ位ん今て音位と短音とを
月花の長秋多ありきより月秋の韻や位
それい音位を今の二花二月もちんと家雅の記
の動変を古例とひきて和歌を例の行人を
ゆつりられきく深や今の短音行の二花二月
い論と及ぶを言い音秋の季を長秋或い言
ふ言と於ふ言及の季も言ふ言
於ふて同季を位れも言法と定べきを

ちれと爾曰脈米こまてたをれと常手共用
とつひおれの配と宮あそれいき秋を清てこる
まこく百合を清て百もこ〳〵月花の秋より
て喜秋と云ひけてたをれの配と宮あれい
そ喜を云ふもをく〳〵むう毛きを月秋
とおこをとうむおこまきとこいををしをこの
喜秋に云ふこかをこんうきられいけ式の大膳ふる
ふと寅淳の古騎とて二〳〵をや遠祇の
宮代と郭〳〵て喜秋と云ふこ宮ふいをを
合歓の衰北七ふ用こなをぜう月きを〳〵れ

こ喜秋ともに云の古例あれい今こ式の者代
こを云ふ〳〵ねうい月をの命秋こて貴就の例
こよれうと子二〳〵きこ八音紙の式をこを今の鍾音
の者代あんこ全く世こ方北秋とこれを古制の
例のあをこをもにうれいい今こう秋門の宮者達
をを北くの寅淳と高級にて用るこをこの
自在こて用こを例の不自在とこ二〳〵
北をく秋子東若式をり月をこ二北の設こう
同事こ云ふ古の者代きて名用いこを面て十二
像こて用子を如義のをこの宮を或を面あり北和

語をもて式を用ひ夜の客誰をもても遺稿のはし
くれたるめて今の子式の凡例となして百世の
備ひとなるもしとなし此本二てわが家の藏書よ
りとりて東語西語の日用をあつめて當時
まゝ日前の接論と字数ひてかく作ると侍ん
それでもをまて弟子此作るへしきれぬも喜ぶ
へき學子所識ことあらまじ例の一似貫として
百篇一発の法ありとをすて千式一万代の師と為も
へきもの有る世用ともりしからぬもの例の
有用之備となし下しそより一刀両断の場あるさる也

悔をなりしけ一冊をおほくそ放翁のことをあらし
て一万代一例の法文あれどおおしきも自己此
石程あるんとくい彼を接論の序をとおしかるを
例と一家の家課より一世の家説として後しく
用格を一百世の明鑒をいさおそるへき
事也

東花式巻之五終

能諸左之如

跋

渡部牧

いよ〳〵れいの家語を子路に授け孔子曰顔回之為人吳若子曰回之信以見於丘乃至子路之為人吳若子曰由之勇以見於丘子貢敬而向曰然則四子何為事先生子曰回能信而不能反乃至由能勇而不能怯第四子者之有以易吾弗與也此其所以事五也云々おれいの子路も顔回も孔子の

所を真言とつゝしい迂詐とせき勇者とつゝへ憶病者として孔子とおるすあとをたれを瞻前忽後と讃して顔回ひとりとなく知れとも情哉不幸短命すして孔子のあとを伴いくとしつゝ命也能諸之如此

齋月楚茶渡めむとしたしみ二千余歳の冥霊を拝して見ることなく世ことなく新むとて所斯ことさらに人間の常性の虛しうひ空と

とあて虛実のちがひとなる道よねあるを一ちうの武陵の芭蕉翁を投子一碗の茶と為ばら

て他諸の雷霆と自在とはるより能信あれと
し信とを共に能勇あれとも勇さたこと
をとく人の孫児の親と共にとかくこと徒さて
人をえらひ弟子七十をつつ拙きあれりしや
日本二千余州をとりて石を移をもつて不可
能れをもて性の天を明るあひて人の及ぶる不あれの
ある一一ほて他諸を俗談平話をもてその及ぶる
不いうむとをもて人をもて俗談のもとあんまれの
事をもてに能あるとを能あんと歌をもれを
尾入たの耳を遠ほをもの句はありて

或を長く或を短くそを能自在あるはる
ちの人のんの能捕とあるありて、をのれをやゆるくと
をとを余不の耳をもの雷ねをもをもく白集の
誠むるあるもてをもるを石をもてに他諸をもう
をもを石をもをもに他諸をもをもて能を俗
俗をもて新を常あるを人をるるかをもを義
大をるるかは事を新沢能尾の一語をもて能俗
一様の優言あるをもく人の及ぶるあるんをや
けるをは式を人の及ぶるあるんをや
の愛語をもり遠く一世の愛議を愛して

更又百世北門鎖鑰為我命

享保庚戌之月日

書林

京寺町一條

野田治兵衛

俳諧書籍目録

獅子庵遺稿

一 本朝文鑑 假名文集 全 十巻

一 和漢文操 假名真名文 全 七巻

一 俳諧十論 新古評論 全 七巻

一 十論為韓抄 秘説 全 五巻

一 新撰大和詞 日本助詞辞 全 二巻

一 和漢百花賦 大和真名文 全 一巻

一 俳諧古今抄 再撰貞享式 全 五巻

一 論語先後抄 大和真名註 全 四巻